

# 「安心・活力・発展プラン2005」 第3回活力部会 委員発言要旨

日時：平成26年12月19日（金）10:00～12:00

場所：トキハ開館5階「ローズ」

No.	項目	発言要旨
1	農林水産業	かぼすブリ、かぼすヒラメなど地元産品を取り扱うときに、流通の仕組みをわかりやすく、手に入れやすいような形にして欲しい。
2		カボス、かぼすヒラメ、かぼすブリなど、地元の人がブランドと思っているが、県外の人はまだ知らない人が多い。
3		新規就農した若い人たちが子育てして住居を持つと考えたとき、どのくらいの所得が必要なのか、その点を含めた新しい就農計画の提案が必要。
4		親の後を継いだ新規就農者にも、外部から来た新規就農者と同様の手厚い支援ができないか。
5		集落営農法人のリーダーの中に女性が一人もいない。女性の活力が必要。必ず役員に女性が入ってもらえるようなことはできないか。
6		農村部は労働力が少ない。集落営農法人等の土地利用型の担い手と、経営規模の大きい個人的・企業的な担い手が連携することで解決できないか。
7		農村では高齢者の活用も考えなければならない。
8		農林水産業ではそれぞれの地域にそれぞれ団体がある。日田には林業関係で9団体ある。それを一つにまとめるデザイナー的人材の育成が必要。デザイナー的というのは、全てに精通し、先を見通せる人。地域の業界の発展につながる。
9		国の補助事業もいろいろあるが、要件が厳しく、地域の実情に合っていない。頑張っている組織、経営体が使いやすい補助事業の仕組みが必要。また、条件不利地域が国に逆提案することも必要ではないか。
10		毎年が異常気象で、自然災害も発生。先日も竹田の露地野菜は降灰被害を受けた。長期的に異常気象対策や自然災害への備えが必要。
11	農林水産業 地域づくり	Uターンして集落を守ってもらう一つの方策として、県外に出て行っている人でも、本籍地を残している人は郷土に戻ってくる意識があるのでは。そういう人に声をかけるのも手ではないか。

No.	項目	発言要旨
12	農林水産業 商工業 海外戦略	海外の需要を取り込むには、それに取り組む人が一番重要。語学ができて、その場で物が売れる、そういう人がいないと回っていかない。
13	商工業	若い人の雇用にミスマッチがある。事業所そのものの内容が伝わっていない。事業所サイドに大きな責任があるが、アピールの仕方、地元産品や企業の紹介など、県にもそのあたりを支援してもらえないか。
14		県にソフト開発を依頼をしたところ、県内の企業で受託できない一部分だけお願いするかたちになった。研究開発は一連の流れがあり、その方が手間も時間もかからない。小さな仕事依頼の場合は他の企業の業績を圧迫するようなことにならないと思うので、県で研究開発の支援をお願いできないか。
15		CSV(社会価値を向上させる取組により企業価値を増大させること)に前向きに取り組む企業を後押しする施策はできないか。
16		経営者の高齢化が進んでいることから、事業継承さらには廃業を支援するといった取組ができないか。県外企業に買収される前に、地域に根ざした大分を愛する企業をつくっていくという意味で、事業継承の取組は大事。
17		ワークライフバランスで、多様な働き方といっても、実際にどうすれば良いのかわからない事業者がいると思うので、仕組みとか具体的な取り組み方法を例示したものがあれば進むのではないか。
18	女性の活躍	出産後の女性が働きやすい環境をどれだけ整えるかが重要。何か仕組みを作って、女性が勤務を継続していくことに対して支援をするとか、企業にとってもプラスになるような仕組みづくりはできないか。
19	ツーリズム	外国人の観光客が増え、それに伴って裕福な観光客も増えた。不景気が続いたので安いお得感のあるサービスの開発は進んだが、それ以外のニーズに応えられるサービスは足りているか。
20		観光振興の継続的な取組には、スペシャリスト・人材の育成が欠かせない。経験やノウハウを蓄積していく仕組み作りも必要。
21		観光業界も人材不足と定着率の問題がある。おんせんコンシェルジュの取組をスタートしているが、位置づけを高めていき若い人がこの業界に入ってきたくなるような魅力づくりの取組を進めて行きたい。
22	地域づくり	空き家の利活用で、家主が貸してしまうと返してもらえないという不安があって踏み切れないという話を聞く。不安を打ち消すような何らかの新しい仕組みづくりが必要。
23		地域の文化が農山村のコミュニティーを維持してきた。維持していくためにも後継者や外部から来た新規就農者が、そういう文化に溶け込めるソフト事業が欲しい。
24	情報通信	情報通信基盤の整備で、ネットがつながる環境を県内至る所に拡げて欲しい。